



偉人伝

ヘレン・ケラー

ko13

Although the world is full of suffering, it is full also of the overcoming of it.

世界は苦難に満ちている。また、それを乗り越えることにも満ちている。

#### ■略歴

ヘレン・アダムス・ケラー（英: Helen Adams Keller）

1880年6月27日～1968年6月1日

教育家、社会福祉事業家。

自分自身も重い障害を背負いながらも世界各地を歴訪し、身体障害者の教育・福祉に尽力。

#### ■幼少期より三重苦を背負う

1880年6月27日、スイスから移住したドイツ系地主の裕福な父アーサー・ケラーと母ケイト・ケラーを両親として、アメリカ合衆国のアラバマ州・タスカンビアにて誕生。

兄弟は異母兄が2人、のちに同母妹を持つ。

1882年、2歳（生後19カ月）のときに高熱にかかり、一命はとりとめたものの、聴力、視力、言葉を失い、話すことさえできなくなってしまう。

突然、障害を持った子の親になってしまったことで父と母は戸惑い、また、こうした状態を招いてしまったことを自分たちの責任と感じてしまって、しつけや教育を施すことができなくなってしまった。

両親は何人もの介護者をヘレンのために雇い入れたものの、誰1人として長続きすることができなかった。

もはや両親としてはヘレンを、ただ溺愛するしか成す術がなかった。

たとえば家族みんなで食事をしていながらも、ヘレンだけは手掴みで食べて、機嫌が悪いとヒステリックにわめき散らすだけ。

しかし家族みんなは、それを黙認する以外になかった。

## ■ヘレンの運命を変えたサリバンとの出会い

そして一家は再び、ヘレンを介護してくれる人を雇い入れることに。

1887年、聴覚障害児の教育を研究していたアレクサンダー・グラハム・ベルの紹介で、マサチューセッツ・ウォータータウンにあるパーキンス盲学校の校長アナグノスに手紙を出し、人材の派遣を要請。

3月3日、やって来たのが同学校を優秀な成績で卒業した当時20歳のアン・サリバンであった。サリバン自身、幼い頃から盲目で、しかも孤児院で育った。その生活は、まさに地獄であったという。

後にサリバンは手術をして、この当時は極めて弱視ながらも視覚を取り戻していた。

そんなサリバンが、その日、初めてヘレンと一緒に食事をして驚いた。

ヘレンは、わめき叫び、料理のお皿をひっくり返していた。「これでは野生の動物と同じではありませんか」と、サリバンは食卓を歩きまわるヘレンを力づくで椅子に座らせて、床に散乱した食べ物を再び皿に盛り、手にスプーンを握らせた。

するとヘレンは、再び猛烈な癇癢を起して暴れた。そんなサリバンのやり方を見て両親は啞然としてしまう。

だが、サリバンはそんな両親を部屋から追い出して、その仕事を続けた。

何度も何度も皿をひっくり返すヘレン。何度も何度も床に散らばった料理を皿に盛り、スプーンを握らせるサリバン。

ヘレンはサリバンの顔を思いっきり殴った。するとサリバンもヘレンの頬を思いっきり張った。

朝からそれを繰り返して、日が暮れた頃、  
ようやくヘレンはスプーンで皿の料理をクチに運んだ。

部屋の外で耳をすませて、  
ただ狼狽する父親はサリバンを解雇しようと言いだす。  
母親は躊躇する。

しかし結局、サリバンの雇用を続けた。

次の日も、また次の日も、食事のとき、  
それはサリバンとヘレンの戦いと化してしまっていた。  
根気強く戦い続けたサリバんに、ついにヘレンが従った。

ヘレンのその態度は、ただ、わがままになっていただけ。

目が見えない、何も聞こえない、しゃべれない、という暗闇の世界のなかで、  
ただ両親の溺愛のなかに身を埋没させて、  
気持ちのおもむくまま自己中心的な生活が続けることしかできなかったのだ。

だがサリバンとの出会いによって、ヘレンの人生は大きく変わった。

サリバンはヘレンに「指文字」を教えた。

それは、指の形によってコミュニケーションを図るというもので、  
これによってヘレンは自分自身のなかの真っ暗な世界から抜け出す術を知る。

ヘレンは、貪欲なまでにサリバンから指文字のやり方を教わった。

それは、まるでヘレンの心のなかで泉が噴き出すかのように。

そして井戸水を手にしたヘレンは、初めて「ウォーター」という言葉を発した。

この子は一生、話すことができないと、あきらめていた両親は感激の涙を流した。

■社会活動家として意欲的に行動

「Character cannot be developed in ease and quiet.  
Only through experience of trial and suffering can the soul be strengthened,  
ambition inspired, and success achieved」

(人格は何もしないで形成されるものではない。  
挑戦と苦しみを経験することによってのみ魂が強化され、  
大いなる希望が生まれ、そして成功するものである)とヘレンは語った。

1897年、ヘレンはケンブリッジ女学院を退学。  
1900年、ラドクリフ大学（現ハーバード大学）へ入学。  
1902年、『わたしの生涯』出版される。  
1904年、ラドクリフ女子大学を卒業、文学士の称号を得る。  
1906年、マサチューセッツ州盲人委員会の委員に就任。  
1909年、社会党に入党。  
並行して作家としても積極的に活動し続ける。  
1916年、世界産業別労働者組合（IWW）にも共感。  
1917年、ロシア革命を擁護した。

ヘレンは福祉活動ばかりでなく、政治的にも活動し、男女同権論、  
婦人参政権、人種差別反対論、また過酷な若年労働や死刑制度、  
そして第一次世界大戦の殺戮に反対した。

これらの主張によりヘレンは FBI の要調査人物に挙げられていたという。

それほどの影響力のある人物になっていた。

そして1936年10月20日、目の病気が再発しながらも、  
たくましく生活をしていたアン・サリバンが他界。  
良き教師として、良き友人として、何歳になってもヘレンを支え続けてきた半生であった。

## ■日本への訪問

1937年（昭和12年）4月15日、横浜港に到着。  
この時、ヘレン・ケラーは横浜港の客船待合室で財布を盗まれてしまった。  
その事が新聞で報道されると日本全国の人々からヘレン・ケラー宛に現金が寄せられ、  
その額は彼女が日本を離れる時まで盗まれた額の10倍以上に達していたという。

ヘレンは東京盲学校（現・筑波大学附属視覚特別支援学校）、同志社女子大学を訪問。  
日本各地を次々と回り、8月10日に横浜港より秩父丸に乗りアメリカへ帰国。

1946年、海外盲人アメリカ協会の代表としてヨーロッパを訪問。

1948年、2度目の日本訪問。

これを記念して1950年、財団法人東日本ヘレン・ケラー財団（現・東京ヘレン・ケラー協会）と、  
財団法人西日本ヘレンケラー財団（現・社会福祉法人日本ヘレンケラー財団）が設立されることになる。

1952年、フランス政府からレジオン・ド・ヌール勲章を受ける。

中東、中央アフリカ、北欧、そして再び日本を訪れる。

1955年（昭和30年）、アン・サリヴァンの伝記『先生』を出版。

他界した朋友岩橋武夫に花を贈るために3度目の来日。

ヘレンは空港で岩橋の名を叫び、岩橋の家で泣き崩れたという。

1964年、9月、アメリカ政府から勲章メダル・オブ・フリーダムが贈られる。

1968年6月1日、ウェストポートの自宅にて永眠。享年87歳。

没後、日本政府から勲一等瑞宝章が贈られた。

## ■ヘレンの言葉

The best and most beautiful things in the world cannot be seen or even touched.

They must be felt within the heart.

「この世の中で、もっとも美しいものは、決して見たり触ることはできない。心の中で感じられるものである」

ヘレンは、こんなことも語っていた。

ちなみに社会心理学の分野で感受性トレーニング(センシティブ・トレーニング)と呼ばれるもの  
があって、

そのなかには目隠しをして富士の樹海を歩く、というプログラムがある。

目を閉じて森のなかに入ると、不安や恐れから身体の他の感覚が急速に研ぎ澄まされる。

草木の匂い、手に触れる感覚、肌に触れる風、鳥の声。

目が見えないからこそ、わかることがある。

ヘレンは何も見えない、さらに聞こえないという底知れぬ不安と恐れ、果てしない孤独な世界のなかで、目が見える、物音を聞きとることができる健常者よりも、はるかに優れた内省性、感受性を磨いていたのである。

When one door of happiness closes, another opens;  
but often we look so long at the closed door  
that we do not see the one which has been opened for us.

「ひとつの幸せの扉が閉じたとき、別のドアが開く。  
しかし、時として私たちはその閉まったドアをとっても長く見つめている。  
そのために、その開いた幸せの扉が見えない」

No pessimist ever discovered the secret of the stars or sailed an uncharted land,  
or opened a new doorway for the human spirit.

「悲観論者は星の神秘を発見したり、未発見の土地に航海したり、  
人類の魂への新しい扉を開くことは決してできない」

また、それだけに彼女の表現は概念的(抽象的)なものが多い。

Security is mostly a superstition.  
It does not exist in nature,  
nor do the children of men as a whole experience it.  
Avoiding danger is no safer in the long run than outright exposure.  
Life is either a daring adventure, or nothing.  
To keep our faces toward change and

behave like free spirits

in the presence of fate is strength undefeatable.

「大抵の場合、安全というものは迷信で、自然には存在しない。  
長い年月で見れば危険を回避することは、危険に身をさらすことよりも安全とはいえない。  
人生は恐れを知らぬ冒険か、あるいは何もなかったか。  
変化に対応し、自由な精神をもって行動することが打ち負かされない強い力になる」

誰にも人生の転機というものがあって、そのとき必ず誰かとの出会いがあったり、協力者が現れる。

ヘレンにしても、サリバンとの出会いがなかったら、彼女の内省性は、  
ただ混沌とした精神のなかに埋没し、  
生涯に渡って人々に発することはできなかったのではないのだろうか。

ちなみにヘレンとサリバンの物語は『The Miracle Worker』として舞台化、  
映画化されており邦題では『奇跡の人』というタイトルで知られている。

世界中の社会的弱者たちのために活動を続けたヘレン・アダムス・ケラーへ、  
そして手を差し伸べて彼女を暗闇の世界から引き上げて奇跡を巻き起こしたアン・サリバンへ、

尊敬と敬意を込めて。

追悼